高齢期におけるペットロス

—過去一年間にペットを亡くした高齢者のインタビューから—
○朝比奈千絵¹・安藤孝敏²

(¹横浜国立大学大学院環境情報学府・²横浜国立大学)
キーワード: ペットロス, 高齢者, 人と動物の関係

Pet loss in old age.

Chie ASAHINA¹, Takatoshi ANDO²

(¹Graduate School of Yokohama National University, ²Yokohama National University)

Key words: Pet loss, Elderly, Human-Animal Bond

【目的】近年、ペットブームの高まりとともに、人と動物の関係 Human-Animal Bond に注目が集まり、この分野に関すること、動物とのふれあいやその死の影響など、多くの書物や研究で取り上げられてきた。例えば、高齢者とペットとの関係に関しては、安藤 (2008) や Ory & Goldberg (1983) などが考察を試みているが、両者とも高齢者の QOL 向上やウェルビーイングを視野に入れた研究であり、ペットの死が高齢者とその生活に何をもたらすかということには言及していない。ペットフード協会 (2008) によれば、犬を飼育している全世帯において、50～69 歳の中老年層の占める割合が最も高い。動物はたいいてい飼い主より先立つことを考えれば、それだけペットとの別れを経験する中高年者が多いということである。しかし、中高年者、特に高齢者のペットロスに関して、治療・予防といった文脈を離れた考察を試みた研究はまだ少ない。よって本研究では、高齢者がペットとの別れをどのように体験しているのか、その全体的な把握をインタビュー調査から試みるものである。

【方法】事前に質問ガイドを作成し、それにそって約 1 時間程度、協力者の了承をいただいて録音しながらインタビューとサブインタビュー 2 名がインタビューを行った。質問ガイドは「飼い始めたきっかけ」「生前のエピソード」「亡くなる時のこと」「亡くなってから今までの心境」であった。調査終了後録音データを書き起した逐語録を読み込んで分析ワークシートを作成し、カテゴリー抽出を試みた。

調査協力者: 過去 1 年以内に、飼い犬と死別した 4 名。協力者の詳細は以下の通り (すべて仮名、個人情報加工済み)。春田さん: 60 歳女性、外科医師。長男はすでに独立、次男・三男、夫の 4 人暮らし。半年前マルチーズの雄とリンパ腫にて死別。現在は何も飼育していない。夏川さん: 65 歳女性、独居、カルチャー教室運営。2 匹いたイタリアングレーハウンドのうち 1 匹と心不全による突然死にて死別。現在は犬 1 匹を継続飼育。秋山さん: 84 歳女性、独居、無職。夫とは死別。柴の雑種と老衰にて死別。現在は飼育していない。冬月さん: 65 歳男性、会社役員。妻と 2 人暮らし。2 匹いた雑種犬 (大型) のうち 1 匹と突然死により死別。現在は犬 1 匹を継続飼育。

【結果】メジャーカテゴリーは「飼い始めたきっかけ」「名付けについて」「生前のエピソード」「死因」「死別のエピソード」「死別したペットとの関係」「喪失に際しての他者との関わり」「今後について」「飼育しない理由」の 9 カテゴリーを抽出したが、本報告ではペットロスにおいて高齢者に特徴的と思われる以下の 4 カテゴリーについて考察する。『亡くなったペットとの関係』: 生前のペットをどのような存在だったと考えているか 『今後』: 今後の飼育予定 『飼育しない理由』: 「今後」において飼育しないと答えた人の理由。内容は以下の通り。『先行き不明』先の状況や心境がどうなる

か分からない 『世話の負担』これまでと違い、犬の世話による負担が大きくなるのではないかという懸念『先立つ不安』自分が犬より先に逝ってしまうのではないかという不安『他者との関わり』: ペットの死に際し関わりがあった相手と関わりの質 (今回は全員が肯定的な受け止め方をしていた)

	春田	夏川	秋山	冬月
関係	家族	家族 子ども	家族	家族 パートナー 信頼のおける 相手
他者	家族	家族 散歩仲間	家族 獣医師	職場の人
今後	不明	予定なし	継続飼育中	継続飼育中
理由	先行き不明	世話の負担 先立つ不安		

【考察】「亡くなったペットとの関係」においてペットとの濃密な情緒的交流を思わせるカテゴリーが抽出されたと同時に「今後の飼育」に関して「飼わない」と「不明」というカテゴリーが出現したことは特筆すべきであろう。既にペットは家族として認知されていることはこれまでも指摘されている通りだが、ペットはどの人にとってもたいいてい「必ず先立つ家族」である。高齢者の場合はそれに加え、ペットよりも自分が先立ってしまうかもしれない恐れをも抱かねばならない。その恐れが、ペットの喪失と共に意識化されてくるのではなかろうか。また、どの調査協力者もペットの喪失に際し、家族や近隣の人々、獣医師などとの関わりを肯定的に受け止めていた。このことの意味は重要と思われるが、本研究からはこれについて示唆できるものは得られなかった。

この肯定的な受け止めと、本調査の協力者は、ペットとの別れを他者に語れる状況にあった方々であったことを考え合わせると、さらに研究を深める余地があろう。また、今回は探索的にカテゴリー抽出を行ったにすぎないため、今後はさらに今回取り上げた以外のカテゴリーも含めた全てのカテゴリーをさらに洗練し、データを厚くした上で、高齢期のペットロスの様相のモデル化を試みていくことが必要になるものと思われる。

本研究は科学研究費補助金 (基盤研究 (C) 課題番号 20530625) を受けて実施された。

【引用文献】

安藤孝敏 (2008) ペットとの情緒的交流が高齢者の精神的健康に及ぼす傾向 横浜国立大学教育人間科学部紀要. III, 社会科学 10, 1-10

Ory, M., & Goldberg, E. (1983) Pet possession and well-being in elderly woman. *Research on Aging*, 5(3), 389-409